

3 ギルバート諸島における戦没者数（海軍部隊）

タラワ環礁

第3特別根拠地隊 佐世保鎮守府第7特別陸戦隊 第22航空戦隊 第755航空隊 第4施設部 第4海軍工作部	4,250
---	-------

マキン（ブタリタリ）島

第3特別根拠地隊派遣隊 第252航空隊 第952航空隊 第802航空隊 第4施設部	1,225
---	-------

アベママ島

第3特別根拠地隊見張所	24
-------------	----

4 ギルバート諸島における遺骨収集

戦没者数	遺骨数				
	昭.46年	57年	58年	61年	計
5,499	93	1	4	1	99

（慰霊巡拝の際及び民間団体による収集数を含む）

Ⅲ. 東太平洋戦没者の碑

政府は、東太平洋地域（マーシャル諸島及びギルバート諸島とその周辺海域）で戦没したすべての人々の霊を慰め、平和への誓いを新たにするとともに友好と親善を深めるため「東太平洋戦没者の碑」を建立し、その周辺に現地の人々の憩いの場となる公園を造成することとした。（環礁41号）

- 1 慰霊碑の名称は「東太平洋戦没者の碑」とし、建設場所は、マーシャル諸島共和国マジュロ島とした。設計は建築家菊竹清訓氏に、銘板は尾川宏氏に依頼した。工事は東海興業株式会社が行うこととなり、昭和58年9月9日着工し、昭和59年3月16日竣工した。
- 2 建設費は、約8,700万円である。
- 3 碑の場所は飛行場より西に約6km、ほぼマジュロ島中央部に位置する。碑はまわりの木々に囲まれた静かな環境の中、敷地のほぼ中央にあり、中心軸は日本の方角を向いている。また、その周辺は、現地の人々から愛される公園施設が造成されているが、碑をはさんで日本の方向（海側）に円形の広場（PLAZA）、後方（道路側）にバンク（BANK）、駐車場（PARKING）及

び国旗掲揚塔（FLAG POLE）等が設けられている。なおこの敷地を、「マジュロ平和公園（MAJURO PEACE PARK）」と称することとした。

- 4 銘板の碑文等は次のとおりである。

東太平洋戦没者の碑

さきの大戦において東太平洋の諸島及び海域で戦没した人々をしのび平和への思いをこめてこの碑を建立する

竣工 昭和59年3月16日 日本国政府
協力 マーシャル諸島共和国政府

英文

IN MEMORY OF ALL THOSE
WHO SACRIFICED

THEIR LIVES IN THE ISLANDS
AND SEAS OF THE EAST PACIFIC
DURING WORLD WAR II AND IN
DEDICATION TO WORLD PEACE

CONSTRUCTED BY THE
GOVERNMENT OF JAPAN IN
COOPERATION WITH THE
GOVERNMENT OF THE
REPUBLIC OF THE MARSHALL
ISLANDS ON 16 MARCH 1984

付図 1

マーシャル諸島陸海軍部隊配備図

〈昭和19年1月〉

ブラウン

陸軍	海上機動第一旅団主力 (第1大隊, 第3大隊, 機関砲隊, 戦車隊, 工兵隊, 通信隊, 衛生隊)
海軍	第61警備隊分遣隊 第68警備隊 (一部) 第952航空隊 第22航空戦隊派遣隊 第4施設部 (芝浦) 第4気象隊派遣員 運輸本部派遣員
	エンチャビ 昭和19.2.19玉砕 エニウエトック 昭和19.2.22玉砕 メリレン 昭和19.2.23玉砕

ルオット

海軍	第22, 第24航空戦隊司令部 第252, 第281, 第752, 第753 第755航空隊 第61警備隊 第4施設部派遣隊 南東航空廠派遣隊
	ルオット 昭和19.2.3玉砕

クエゼリン

陸軍	海上機動第一旅団第2大隊 主力 配属 工兵隊2ケ小隊 通信隊 一部 第3大隊第7中隊 配属 迫撃砲1ケ小隊 南洋第一支隊第5中隊の 1ケ小隊	海軍	第6根拠地隊司令部 第61警備隊 主力 第6通信隊 第6潜水艦基地隊 第4需品廠支部 第4經理支部 第13軍事郵便所 第4気象支隊 第4施設部派遣員 第4工作部派遣員
クエゼリン 昭和19.2.5玉砕			

クサイ

陸軍	南洋第二支隊 歩兵第107聯隊 (本部, 第1大隊, 砲兵中隊)
海軍	第42警備隊派遣隊

ヤルット

陸軍	南洋第一支隊第2大隊 (本部)	海軍	第62警備隊 第4施設部 (一部) 第4需品廠 (一部) 第4気象隊 (一部)
----	--------------------	----	--

ウオッゼ

陸軍	南洋第一支隊第5中隊 機関銃中隊 歩兵砲中隊 海上機動第一旅団第2大隊 本部先発員 第4中隊	海軍	第64警備隊 第531, 第552, 第802航空隊 第4海軍施設部 第104海軍航空支廠 第4海軍気象隊 第10軍事郵便派出所
----	---	----	---

マロエラップ

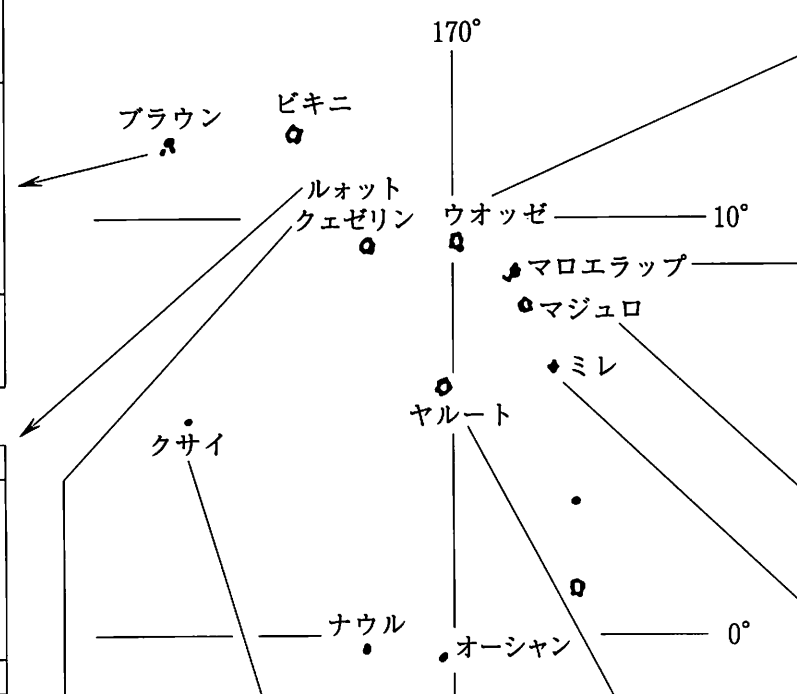
陸軍	南洋第一支隊第7中隊 海上機動第一旅団第6中隊	海軍	第64警備隊分遣隊 第63警備隊 第4施設部, 第4需品廠 第252, 第752, 第755 航空隊派遣隊 第10軍事郵便派出所
----	----------------------------	----	---

マジュロ

海軍	第66警備隊派遣員 芝浦施設補給部派遣員
----	-------------------------

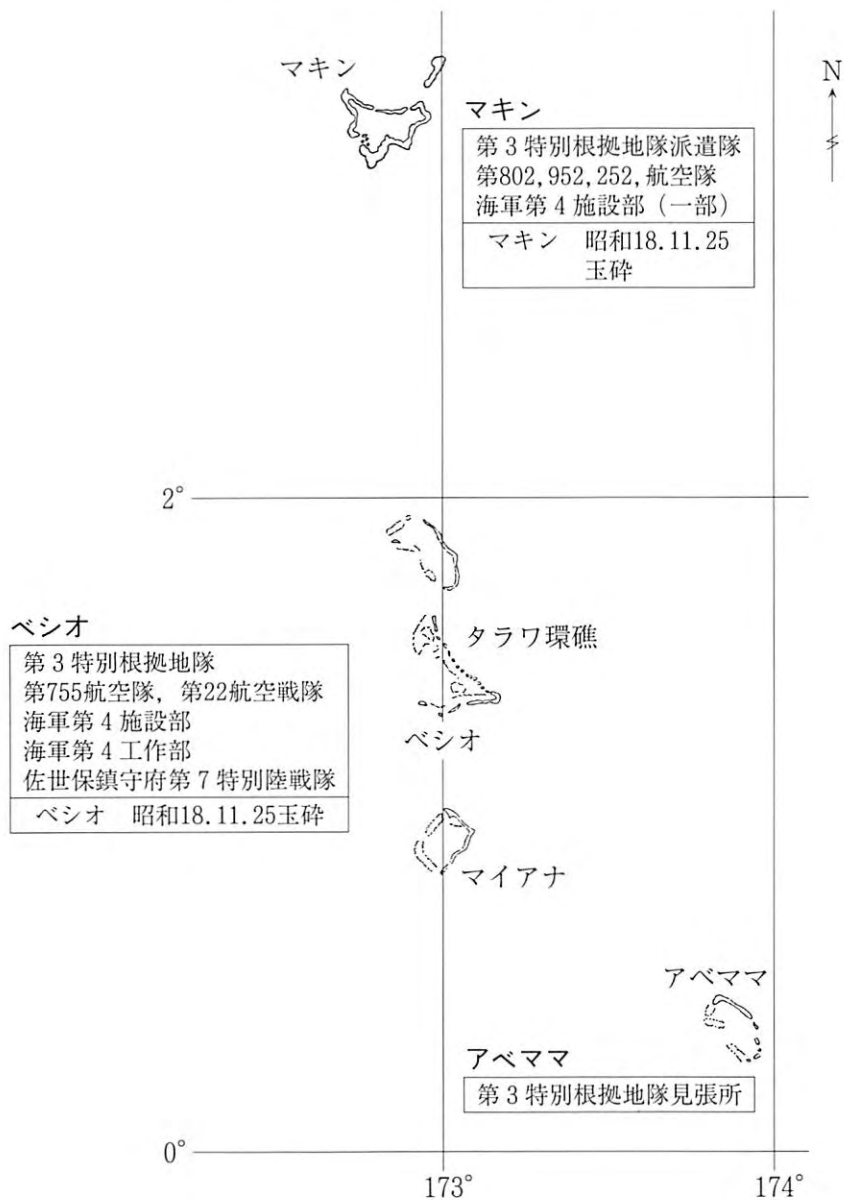
ミレ

陸軍	南洋第一支隊主力 (本部, 第1大隊) 歩兵第107聯隊第3大隊 ◇ 砲兵大隊 ◇ 工兵中隊	海軍	第66警備隊 第4艦隊司令部の一部 第552航空隊の一部 第4施設部 第4需品廠 第4気象隊 第10軍事郵便派出所
----	--	----	---



付図 2

ギルバート諸島海軍部隊配備図 〈昭和18年11月〉



〈付図について〉

- ・ 図は、説明のために作成した略図ですから、図に表示の緯度・経度をもとに、南洋群島概図(8頁)その他の地図と対照して下さい。
- ・ 各島名・環礁名については、当時と呼び方が変わったものがあります。これらの呼び方については〈島の名・新旧対照〉(2頁)を参照して下さい。
- ・ 各部隊の状況、戦没者数、遺骨収集等については、本文(29~37頁)を参照して下さい。

IV. 関連資料

大東亜戦争における戦没者数

さきの大戦は、ほぼアジア全域におよぶ広大な戦域に長年にわたって続けられ、しかも極めて苛烈な戦いであった。この戦いにおける内外の戦没者は、軍人軍属、準軍属約230万名、外地で非命にたおれた一般邦人約30万名、戦災死没者約50万名、あわせて約310万名の多きにのぼった。これら戦没者のうち日本本土以外の各戦域(硫黄島、沖縄を含む)における戦没者は約240万名で、地域別戦没者の概数は次のとおりである。

硫黄島	20,100名
沖縄	186,500名
中部太平洋	247,000名
フィリピン	518,000名
ベトナム, ラオス, カンボジア	12,400名
タイ, マライ, シンガポール	21,000名
ビルマ, インド	167,000名
ボルネオ	18,000名
インドネシア	25,400名
西イリアン	53,000名
東部ニューギニア, ビスマルク, ソロモン諸島	246,300名
韓国	18,900名
北朝鮮	34,600名
旧満洲	245,400名
中国本土	465,700名
台湾	41,900名
樺太, 千島, アリューシャン	24,400名
ソ連本土	52,700名
モンゴル	1,700名
合計	2,400,000名

(厚生省援護局・昭和52年10月発行「引揚げと援護三十年の歩み」より)

V. マーシャル諸島と ギルバート諸島の墓苑

(本会の資料より)

1 クワゼリン (クエゼリン)

昭和19年2月、米軍は日本人戦死者を激戦の跡に埋葬して柵を廻らし、鳥居を建てて丁重に管理してきた。昭和35年6月に同島を訪れたアジア航空測量(株)の長谷川 敏氏(現本会篤志会員)によってその詳細が、翌36年5月23日の朝日新聞に紹介された。霧の彼方の玉砕の島が忽然と現れたのに、関係遺族は大きな衝撃をうけた。(環礁49号)本会は創設の初めから、全戦域を象徴する忠魂慰霊碑を、戦没者の最も多いクワゼリン島に建てることを念願し、同島駐屯の米軍司令官にお願いし累次の折衝の末昭和42年3月に許可を頂いた。

碑の制作は順調に進捗し、昭和43年8月17日に、芝白金の迎賓館(元朝香宮邸)で会員、来賓多数列席して清祓式が行われた。

碑の本体中心部に、マーシャル諸島、ギルバート諸島とその周辺海域で戦死された3万余柱の霊璽簿(英霊の氏名簿冊)と会員から寄せられた霊璽票が、特製のステンレス永久容器に納められたことにより、名実共に入魂

の儀式となった。

入念に梱包された碑と資材は、横浜から船積され、10月29日に現地到着、ミラー司令官の好意あるお取り計らいや、徳原徳子さん、チェンバレン和子さん、中田さん、大里さん、その他在島の各国の人々の奉仕によって仕様書どおりに組立て作業が完了した。

昭和43年12月1日、軍関係者と奉仕者が参列し、牧師さんのお祈りで除幕式、慰霊祭が厳粛にとり行われた。(環礁9号,10号,13号)

慰霊碑の概要

碑の名称

マーシャル諸島 戦没者忠魂慰霊碑
ギルバート諸島

建立者 マーシャル方面遺族会

建立年月日 昭和43年12月1日竣工

設計 鷹本 初太郎

製作 第一石材工業株式会社
友常石材株式会社

材料 本体

稲田石(茨城県笠間市産出)

銘板

ブラジル産F・G・1(黒御影)

本体の要項 竿石 横122cm 縦102cm

厚さ92cm 重量約3,100kg

碑面揮毫 ・表面題字署名

本会名誉会長 朝香鳩彦
〈朝香宮鳩彦王〉

- ・会名署名
石橋梅子〈石橋堪山氏夫人〉
- ・表面県名揮毫 各都道府県産の銘石に当該知事
- ・裏面碑文署名
本会会長 林 茂清

〈補遺〉 碑の表面に日本地図を組み入れてある。これは戦没者の出身地が日本全土に及んでおり、英霊が故郷と祖国を恋う想いを表わしている。

2 ロイ・ナムル(ルオット・ニムル)

クワゼリンと同様昭和19年2月玉砕の直後米軍によって日本人戦没者墓苑が造られた。昭和36年(1961年)に、米軍の請負会社グローバル・アソシエート社のロイ・ナムル島および外洋諸島の居住管理副支配人として、退役陸軍大佐フランク・H・セラフィーニ氏が着任した。以来13年間に同氏は、荒れ果てた古戦場のロイ・ナムル島を、誰が見ても一目で地上の楽園と思える場所に蘇らせたと言われる。

墓苑は広々とした緑の公園の中にある。墓苑の中は、緑の芝生に覆われ、色鮮やかな花

壇と周囲の白色の柵が美しい。一際目をひく赤い大きな鳥居は、クワゼリンと同じような和英両文で「日本人墓地」と書かれている。慰霊碑の中央上部には16弁の菊花御紋章が気高く彫られており、碑文は英文で「ロイ・ナムル島防衛のため自らの生命を捧げた日本の勇士ここに眠る」とある。

アメリカ人の度量の大きさに頭が下がる。クワゼリンもロイ・ナムルも墓苑の管理は米軍とそれぞれの島に勤務する人々の奉仕によって続けられていると聞き、感謝の言葉もない。ありがたいことである。

3 タラワとブタリタリ(マキン)

タラワ環礁のベシオ島においても、クワゼリンやロイ・ナムルと同様、昭和18年11月米軍によって激戦の跡に日本人墓苑がつくられた。昭和56年8月29日、本会の慰霊団がベシオ町役場の倉庫に保管されていた国籍不明の御遺骨数十体を役場係員と共に墓苑内に埋葬した。(環礁36号) ギルバート関係の有志会員から本会に対してベシオ島に慰霊碑(墓碑)建立について協力の要請があり、本会役員会は協議の末、特例として一定の条件のもとに協力することとした。

碑はギルバート部会が第一石材(株)に製作を依頼し、材料はクワゼリンの碑と同様の御影石を用い、碑名は「南瀛(ナンエイ)の碑」とし、浮田会長が揮毫した。

完成した碑は昭和57年7月25日ギルバート部会から本会に引き渡され、靖國神社において清祓式を行い現地に送られた。同年11月23日、ベシオ島慰霊公園で本会会員35名と、M・タニエラ国会議長、A・バイテケ駐日大使ほか来賓、協力者総計約90名が参列してキリバス・日本両国国旗をかかげた斎場で、除幕式に引き続いて慰霊祭が厳粛盛大におこなわれた。(環礁38号)

昭和58年末に栗林本会顧問(キリバス名誉総領事)から所蔵する仏像一体を寄贈されたので、「南瀛の碑」の付属「マリア観音像」を製作した。昭和59年3月、政府によって建立された「東太平洋戦没者の碑」竣工式に参列した本会のギルバート関係会員17名は、3月16日に折りよく完成した「マリア観音像」の除幕式を行った。(環礁41号)

昭和63年5月22日、日本・キリバス友の会(代表栗林本会顧問)は、ブタリタリ(マキン)戦没者慰霊のため同島に「天女の像」を建立、寄贈した。(環礁50号)

3 本会のあゆみ

本文の（ ）内の数字は「環礁」の号と頁を示す。

歴代名誉会長，顧問，相談役，会長



名誉会長
朝香鳩彦
昭和38. 6. 29～56. 4. 12



名誉会長
浮田信家
会長 昭和49. 2. 6～60. 2. 10
名誉会長 昭和60. 2. 10～平成2. 1. 14



顧問
石橋湛山
昭和38. 6. 29～48. 4. 25



顧問
古賀織之助
昭和46. 9. 1～52. 3. 1



顧問
栗林徳五郎
昭和60. 2. 10～現在



相談役
朝香孚彦
昭和38. 6. 29～平成元. 2. 12



相談役
大給湛子
平成元. 2. 12～現在



会長
林茂清
昭和38. 6. 29～44. 2. 6



会長
村上義一
昭和44. 2. 6～49. 1. 20



会長
佐藤宗丕
昭和60. 2. 10～現在



朝日新聞 創元社 正岡子規 藤澤茂吉 規 規

寡兵二千で血闘五日

五萬餘の敵に大打撃

指揮官は 軍屬千五百も散華

【本報特稿】 船十八日五時五十分、タラワ、馬及、マン、島守備の帝國海軍陸戦隊は十一月二十一日以来三千の寡兵を以て五萬餘の敵土陸軍を激戦、勝勢漸くなる敵機の銃撃及砲射撃に抗し、連日奮戦、我に數倍する大損害を與へつゝ敵の有力なる機動部隊を誘引して友軍の海空作戦に至大の奇襲をなし、十月二十五日最後の空襲を敢行、全員玉碎せり。指揮官は海軍少將柴崎源次なり。



聖旨を拜し感泣勇戦

孤島を染む祖國鎮護の碧血

送放佐大原東



本日本軍海軍少將柴崎源次

本日本軍海軍少將柴崎源次は、十一月二十一日、タラワ、馬及、マン、島の守備隊を率ゐて、五萬餘の敵土陸軍と激戦し、勝勢漸くなる敵機の銃撃及砲射撃に抗し、連日奮戦、我に數倍する大損害を與へつゝ敵の有力なる機動部隊を誘引して友軍の海空作戦に至大の奇襲をなし、十月二十五日最後の空襲を敢行、全員玉碎せり。



將少 柴 源 次

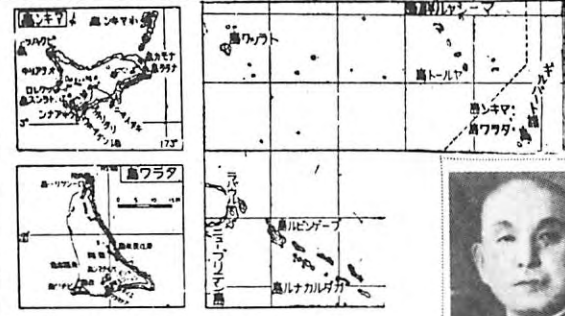
柴源次少將は、十一月二十一日、タラワ、馬及、マン、島の守備隊を率ゐて、五萬餘の敵土陸軍と激戦し、勝勢漸くなる敵機の銃撃及砲射撃に抗し、連日奮戦、我に數倍する大損害を與へつゝ敵の有力なる機動部隊を誘引して友軍の海空作戦に至大の奇襲をなし、十月二十五日最後の空襲を敢行、全員玉碎せり。

最後の報告 戦況に變化なし

十一月二十一日、タラワ、馬及、マン、島の守備隊は、五萬餘の敵土陸軍と激戦し、勝勢漸くなる敵機の銃撃及砲射撃に抗し、連日奮戦、我に數倍する大損害を與へつゝ敵の有力なる機動部隊を誘引して友軍の海空作戦に至大の奇襲をなし、十月二十五日最後の空襲を敢行、全員玉碎せり。

戦況

十一月二十一日、タラワ、馬及、マン、島の守備隊は、五萬餘の敵土陸軍と激戦し、勝勢漸くなる敵機の銃撃及砲射撃に抗し、連日奮戦、我に數倍する大損害を與へつゝ敵の有力なる機動部隊を誘引して友軍の海空作戦に至大の奇襲をなし、十月二十五日最後の空襲を敢行、全員玉碎せり。



全國民戦士たる覺悟

玉碎の忠魂に應ふる途 國愈々多

全國民戦士たる覺悟 玉碎の忠魂に應ふる途 國愈々多。十一月二十一日、タラワ、馬及、マン、島の守備隊は、五萬餘の敵土陸軍と激戦し、勝勢漸くなる敵機の銃撃及砲射撃に抗し、連日奮戦、我に數倍する大損害を與へつゝ敵の有力なる機動部隊を誘引して友軍の海空作戦に至大の奇襲をなし、十月二十五日最後の空襲を敢行、全員玉碎せり。



田 田

来るべき時が、遂に来た。

数日来、日を追って悲愴感を加えてきた南方戦線の戦況報道に不吉な予感が去来していたが……

父を、夫を、わが子を、兄弟を南方に送っていた留守家族にとってこの日の新聞紙面は、冷酷非情なものであった。やがてそれぞれの家族に戦死公報が届けられ、未だ曾って会ったこともない大勢の人が玉砕の島の遺族という縁に結ばれることになった。残された者たちは、生きることだけが精一杯の歳月に耐えた。もしかしたら……という秘かな願いは夢と消え、征った人は遂に還らなかった。

遺族会の結成

37年2月6日、例年のように靖國神社の永代神楽祭に参列した遺族たちは、お互いがクエゼリン島やその付近で肉親を失った者同志であることを知って親しみを感じ、話題は戦死者のことからお互いの家族に及び、時の経つのを忘れた。人間のあたたかさを肌に感じた思いであった。

山浦信子さんは「母が“国雄は、家がわからなくて探しているにちがいない”と言って“戦死したのよ”と言っても聞き入れない。

大本營發表

(昭和十八年十二月二十日
十五時十五分)

「タラワ」島及「マキン」島守備の帝國海軍陸戦隊は十一月二十一日以來三千の寡兵を以て五萬餘の敵上陸軍を邀撃、熾烈執拗なる敵機の銃爆撃及艦砲射撃に抗し、連日奮戦、我に數倍する大損害を與へつつ敵の有力なる機動部隊を誘引して友軍の海空作戦に至大の寄與をなし、十一月二十五日最後の突撃を敢行、全員玉砕せり
指揮官は海軍少將柴崎惠次なり
尚兩島に於て守備部隊に終始協力奮戦せし軍屬約一千五百名も亦全員玉砕せり

大本營發表

(昭和十九年二月二十五日
十六時)

「クエゼリン」島竝に「ルオット」島を
守備せし約四千五百名の帝國陸海軍部隊は一月三十日以降襲せる敵大機動部隊の熾烈なる砲爆撃下之と激戦を交へ二月一日敵約二ヶ師團の上陸を見るや之を邀撃し勇戦奮闘敵に多大の損害を與へたる後二月六日最後の突撃を敢行、全員壯烈なる戦死を遂げたり
「ルオット」島守備部隊指揮官は海軍少將山田道行にして「クエゼリン」島守備部隊指揮官は海軍少將秋山門造なり
尚兩島に於て軍屬約二千名も亦守備部隊に協力奮戦し全員其の運命を共にせり

年毎に足が弱くなって来年は来られないかも」と嘆いた。同じ思いの親が大勢居ると思われるので、区切りをつけてあげるための懇談会を企画し、水交会にも協力を依頼し、知る限りの関係者に通知した。(9-1)

38年2月6日、永代神楽祭のあとの懇談会で「遺骨収集や現地慰霊を政府がやらないならば我々遺族でやろうではないか」との林茂清氏の一言が、遺族会結成の口火となり、この日から林さんの女婿浮田信家氏の超人的な奉仕作業が始まった。戦没者とその遺族の調査、原簿作成という大仕事を厚生省の職員と浮田一家の奉仕により短時日の間にやりとげた。

38年6月29日に創立総会を開催して会の方針を決定し、20年祭の準備にかかった。

(4-10)

20年祭前日祭

39年2月5日、九段会館の大ホールに、会員、賛助者、来賓約800名が参集した。

正面壇上に6,700余柱の霊璽簿が安置され白菊で飾られた。第1部は元6根参謀林幸市氏による戦況と現地状況報告、映画「靖國の四季」鑑賞。第2部は、朝香名誉会長、石橋顧問、林会長ほか来賓の献花。林会長、石橋

顧問、来賓代表の挨拶。第3部はNHK宮田輝アナウンサーの司会で東京放送児童合唱団の合唱、西崎流若葉会の民謡おどり、海上自衛隊東京音楽隊の演奏とつづき、更に帰還した戦友から戦場の思い出などのお話が披露された。(1-2)



前日祭



東京放送児童合唱団



大ホールいっぱいの参列者

20年祭当日祭

祥月命日の2月6日は雲一つない日本晴れの好天候、昨日につづき約800名が靖國神社に参集、10時30分より朝香名誉会長の御挨拶の後、皇宮警察音楽隊の奏でる「海ゆかば」につづいて、筑波宮司の祝詞、朝香名誉会長の祭文が奏上され、全員御本殿に昇り、恭しく参拝した。

式典終了後、希望者約250名は大型バス4台に分乗し、皇居を拝観した。(1-2)

肉親が何時何処でどんな状況の下で戦死したかを知らなかった遺族たちが、始めて真相を聞き、同じ境遇の仲間たちが沢山居たことをお互いの目で確かめ合うことができた。

伝え聞いて翌年はルオット、ブラウンの遺族たちが加わった。(1-2)

霊 砂 帰 還

遺骨，遺品が無理ならばせめて玉砕の島の砂なりともという切なる願いが，土屋太郎氏（本会篤志会員）と親交のあったウィリアムス氏とその友人スヴァンバーク氏によって叶えられた。ケゼリン，ルオット，ウオツェの砂を採集し，わが護衛艦「あまつかぜ」に託送して下さった。菊池同艦艦長は，これを士官室に奉安して，40年10月9日横須賀に帰港された。

この砂は早くからロスアンゼルスまでは届いていた。単なる砂とすれば，税関検査の対象となり面倒になる。そこで海上自衛隊にお願いして特別のお取り計らいを頂いたものである。

記念艦三笠艦上での引渡式は，海上自衛隊のご協力により，護国の英霊をお迎えするに相応しく荘厳丁重を極め参列した遺族は斉しく感激した。

菊池艦長から，厚生省の村岡課長（本会篤志会員）に引渡された霊砂は，同日中に厚生省内の霊安室に安置され，10月15日に林本会会長が受領して希望する会員にお頒けした。

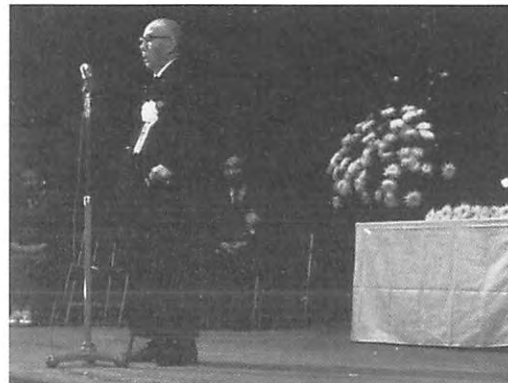
（3-2）



20年祭（39.2.6）向かって左から松平永芳様，石橋梅子様，朝香名誉会長，林会長



朝香孚彦相談役



石橋湛山顧問



ケゼリン墓苑のスヴァンバーグ氏



三笠艦上



霊砂引渡し



古賀副会長謝辞



霊砂発送作業

現地調査・遺骨収集・第1回現地慰霊

現地事情の解明は会の今後の活動の基本なので、「環礁」を通じて参加者を募ったが半年間という長旅の故か、会員からの希望者がなかったので、本部役員の浮田常任幹事と佐竹幹事の兩名を派遣することになった。

事前調査は入念周到に行われた。各島の戦

史、地図、海図、水路誌等の資料集めや、帰還者よりの教示をうけるなど可能なことはすべて実施し、米英両国との交渉、手続き、生活資材や収骨・慰霊祭用具、食糧、医薬品等が準備された。

42年4月22日、パシフィックアイランダー号は見送りの会員が航海の平穏を祈る中、横浜棧橋を離れ一路南の海に向った。両氏の半年間の行動、見聞等については「環礁」6号以降に詳報されているが、「只一誠あり一私なし」英霊の慰霊一筋に献身する真摯な姿は、現地の心ある人々の共感を得、多くの方々から心温まる数々の御協力を頂いた。(6-1, 7-2)

42年10月19日、両氏は重責を完全に果し、元気で横浜に帰港した。その全航程1万900海里、182日間のうち船上生活は132日に及んだ。

上陸した島は、タロア（マロエラップ環礁）ルオット、ミレ、イメエジ（ヤルート環礁）タラワ、マキン、オーシャン、ナウル、ウオッセ、マジュロ、クサイの各島でそれぞれに墓標を建てお祈りした。

ブラウンとケゼリンは上陸できないのでヒーレー司令官に墓標を建てることを依頼した。また氏名不詳の遺骨12柱および27島の霊

砂を伴って帰国した。

両氏の調査により各島の現状もわかり人間関係もでき、懸案の現地慰霊団派遣の希望も出てきた。「最後の地を一目でいいから見たい。内地の水を、お酒を、タバコを、家族の写真を持って行ってやりたい」との切実な声は毎年2月の慰霊祭のあとで開かれる総会で、年毎に高まってきた。(7-2)



ミ レ (42. 6. 26)



ナ ウ ル (42. 7. 31)



パンフィックアイランダー号



タ ラ ワ (42. 7. 22)



クェゼリン (42. 12. 28)



マロエラップ (42. 6. 14)



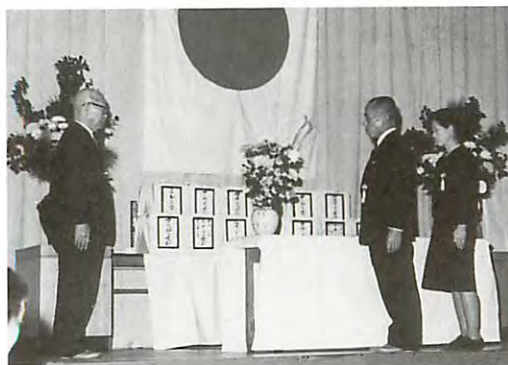
マ キ ン (42. 7. 24)



クェゼリン (42. 12. 28)



クェゼリン(42.12.28)



村上副会長謝辞

クェゼリンに慰霊碑建立

「玉砕の島に全戦域を象徴する慰霊碑を」との創立以来の念願は、42年3月24日に現実のものになった。米軍から建立が許可されたのである。クェゼリンの軍司令官や、米本国の当局者との折衝は浮田常任幹事の粘り強さが

功を奏したのである。

役員2名の現地派遣と、慰霊碑建立という大仕事を連続して実施できた財政力は偏に会の総力結集の成果であった。

村上副会長や石橋顧問夫人を煩わし、政府や都道府県知事に協力をお願いした。また、林会長から全会員に寄付をお願いしたところ会員の反応は非常なもので、会員の期待の大きさがひしひしと感じられた。

碑の設計、製作は関係者の奉仕によって順調に進行した。碑の正面に各都道府県の銘石を嵌込む。しかも知事の揮毫を頂いて彫込む、という手のこんだ作業も連絡に当たった会

員のお骨折りにより、予定どおり進行した。

碑の中に収納された霊璽簿(3万余柱の戦没英霊の氏名簿冊)は、浮田夫人が一字一字心をこめて謹書され、会員から寄せられた霊璽と共に、特製のステンレス製の永久容器に納められた。

43年8月17日、白金の迎賓館(元朝香宮邸)で碑の清祓式が執行された。見事に完成した碑を間近にして会員の顔は皆晴ればれとしていた。次の望みはクェゼリンでこの碑に直面することである。(9-1)

丁重に梱包された碑は、パシフィックアイランダー号で10月29日クェゼリン入港、ミ



忠魂慰霊碑の清祓式(白金迎賓館 43.8.17)

ラー司令官の好意あるお取り計らいや、徳原徳子さん（篤志会員）、チェンバレン和子さん、中田勇さん、大里清さんその他同島勤務の各国の大ぜいの方々の協力と奉仕によって仕様書通りの建立作業を完了した。

12月1日、牧師のお祈りで除幕式、慰霊祭が、島の方々大勢によって行われた。盛花はホノルルから航空便で取りよせられ、碑の前のテーブルに真新しい白布をかけ本会から送ったお供物を並べ、一人ひとりが線香をあげた。米軍の幹部夫妻が何組も焼香して下さって、大そう心のこもった和やかなおまつりであった。(13-10)



忠魂慰霊碑組立



忠魂慰霊碑完成 (43.12.1)

30年祭斎行・副碑奉納

49年2月6日、会員、賛助者300余人が参列し30年祭を厳粛に斎行した。終って宝物遺品館2階で忠魂慰霊碑の副碑奉納式を行う。クェゼリン島は軍事機密の島で参拝は難しいので、国内に小型の副碑を作り、遥拝の場とした。

式の後、九段会館で会食し、愛国歌手渡辺はま子さんの熱唱と、モンテンルパ戦犯助命運動のお話に感動する。

直会旅行参加者はバス2台で箱根湯本方面に出発。(13号より18号まで) (21-12)

第2回現地慰霊

クェゼリン島は、米国にとってミサイル戦略上の最重要機密の地であり、米国人にも厳重な入域管制が敷かれているが、本会に対し50年6月9日付の公文書で墓参のための入域が許可された。法人格のない本会が、米国に認知されたのである。

50年8月10日、マーシャル諸島慰霊団一行36名は羽田発、ホノルルを経て12日にマジュロに着いた。島の方々が大勢出迎えて全員にレイをかけて下さった。その夜は全員が夕食会に招かれた。日系のサブロウさんが「初めに君が代をいっしょに歌いましょう」と提言され、約100名が声を限りに、海の底まで届けとばかり合唱した。唄と踊りの、予想もなかった楽しいパーティーであった。

8月14日、希望者8名は小型機をチャーターしてマロエラップ環礁タロア島に飛び、激戦の跡を巡り、英霊に祈りを捧げた。夜は昨夜のお返しに野外パーティーを催し、島の皆様から「あの椰子の島」の歌を習った。

8月15日、夢にまで見たクェゼリンの墓地は、青く、広く、清浄であった。

語りかける者、お経をあげる者、酒や故郷

から持参した水を供える者、時間は容赦なく過ぎる。後ろ髪引かれる思いでお別れをし、グアム経由で8月16日帰国した。(24-1)



マロエラップ (50. 8. 14)



クェゼリン (50. 8. 15)

第 3 回 現 地 慰 霊

52年8月9日、一行25名は成田発、グアム経由、11日にナウルに着き、翌12日に外国人墓地で慰霊祭を行った。

当地で軍医長をしておられた土岐正氏の明暗流尺八の阿字観の吹奏は、切々として泉下に滲み入る感があった。

13日ナウル班と分かれてタラワ着。

14日ベシオ島の戦蹟を巡ったあと、庁舎倉庫に散乱していた御遺骨数十体を木箱に収め、水と花を供え焼香した。

この御遺骨は、前年(51年)この島を訪れた田中、柴崎幹事外一行が11月26日にこの場所で見つめたものである。一見して日本人以外のものも混っているので、協議の結果この島の習慣により埋葬して頂くこととした。

15日ジョン・スミス総督を訪問し、明日の慰霊祭出席の要請と、御遺骨の処理法について陳情した。

(註) 10月5日付でジョン・スミス総督から浮田会長宛来信「9月23日(金)に、日本神社のあった所でバハイ教の指導者主催により埋葬式を行った」

16日ベシオ島の慰霊公園で慰霊祭を行う。スミス総督夫妻、議員、市長外官民大勢の参

拝を頂く。終って直会の野外パーティーを催した。

18日、ナア島に赴き、マキン島戦没者の慰霊祭を行ない8月21日帰国した。(28-2)

第 4 回 現 地 慰 霊

53年8月28日靖國神社に集合した35名は成田泊。29日朝成田を発ってその夜マジロに着いた。12時を大分過ぎていたのに大勢でレイを持つての出迎えに感激した。30日の夜は歓迎パーティーに招かれ、31日はお返しの親善パーティー。9月1日にクェゼリン墓地にお参りができて感謝の思いを新たにすした。

9月2日サイパンで、ドワイト・ハイネさん御夫妻と昼食をともにした。同氏は昭和42年に浮田、佐竹両氏が現地調査の時大層お世話になった方で、太平洋信託統治領政府特別補佐官である。同日帰国した。(30-1)

第 5 回 現 地 慰 霊

55年7月31日成田を発った一行8名は、深夜クェゼリン空港に着き出迎えの皆様案内されてクェゼリンロッジに入った。

ウイッテリー司令官の御好意によって初めてロッジに宿泊が許可されたのである。在島

3日の間、何度もお詣りでき、島の皆様にVIP並みの歓待を頂いた感激は一人であった。浮田会長の永年の努力が開花したものである。8月3日帰国した。(34-2)

第6回現地慰霊

56年8月21日一行15名は成田発、グアム1泊、マジロ3泊の後ケゼリンに着いた。前回同様ロッヂに宿泊させて頂き、心ゆくまで静かにお詣りをする事ができた。秋葉山丸の沈んでいる真上で船上慰霊のできたこと、あきらめていたルオット墓参の叶えられたこと、一行中に飯島導師の居られたこと等、恵まれた慰霊の旅であった。

ルオットの日本人戦没者慰霊碑は、米退役陸軍大佐F・H・セルフイー氏の格別の御努力によって建立されたとのことである。8月28日帰国した。(36-2)

第7回現地慰霊

56年8月25日一行6名は成田発、グアム2泊、ナウル2泊、タラワ6泊。タラワに着いて、会長から依頼された御遺骨(52年8月に会長がスミス総督に埋葬を依頼したもの)の処理法、場所等を尋ねたところ未だに政府の

倉庫にあることがわかった。

埋葬をお願いしたところ、ベシオ政庁のシャオンさんは、明日慰霊公園に埋葬しますとのこと。

8月29日、女性4人には慰霊公園の近くにて待機して貰い、シャオンさんが掘って下さった穴に男たちで、御遺骨を納め埋葬してから女性たちに来て貰い1人ずつシャベルで土を入れた。

お供えものをし、香をたき、お経をあげ、詩を吟じ、御冥福を祈った。シャオンさんたちも加わって下さり、「墓碑を送ってくれたら建ててあげる」との申し入れをいただき、9月4日帰国した。(36-2)

ギルバートに慰霊碑建立

56年9月、ギルバート関係遺族は建碑につき本会に協力を求めた。本会は既に関係全戦域を象徴する慰霊碑をケゼリン島に建立済みであるが、今回は特例として一定の条件のもとに協力することとし、会長からキリバス大統領に申請したところ、希望事項を受入れて承認され、着工、清祓式、船積みと、順調に経過し、1年経たぬうちに玉砕の島ベシオ島で除幕式の運びとなった。(36-16, 38-1)

第8回現地慰霊

57年11月21日、一行35名は成田を発って、22日タラワ到着、タバイ大統領閣下に御礼を申し上げた。

23日、慰霊公園の慰霊碑「南瀛(ナンエイ)之碑」の周辺はベシオ町の皆様によって清掃され、鮮やかな日・キ両国の国旗が掲揚された。

除幕式には、キリバス国会議長、各省大臣、議員外多数の来賓があり総勢90名を超える盛況であった。追悼の詞につづき、全員が献花、礼拝し慰霊の式を終え、マニアバに席を移して直会となった。町の提供による100余人の民族舞踊は若い国の躍動を思わせ、壮観であった。11月27日帰国した。(38-1)



南瀛之碑除幕(タラワ 57.11.23)

40年祭 齋行

59年2月6日、40年祭は会員、賛助者159人参列し、楽水会（海軍軍楽隊出身者）の奉仕による献楽もあって厳粛に齋行された。

参集所で楽水会の演奏数曲を聞き、松平宮司、栗林キリバス国名誉領事、堀籠楽水会会長のご挨拶を頂いた。散会后、直会旅行参加者65人は伊豆山方面に出発した。

(41-10~12)

会の存続に協力を要請

57年末より、本会の財政に不安をもつ方々から「会の主要目標事業を完了した創立20周年を期して、会を解散しては」との意見が出された。以来4回にわたる役員会で慎重に審議した結果、58年7月23日に「会員の多くは心のよりどころとして会の存続を望んでおり、海外に建立した慰霊碑は我々が護らなければならないので、会の活動の一部を縮小するとしても永く存続させること」と決議した。(40-13)

定例の慰霊祭を「2月6日」から「2月第2日曜日」に変更して家族縁者特に若い世代が打揃って参拝できるようにし、会報の「環礁」への投稿や会費完納等の協力を要請し

た。(41-12)

政府による東太平洋戦没者の碑竣工

国家の要請により戦場に赴き戦死した者の慰霊は、国家が手厚く行うべきものであるとの考えから、本会創立以来政府に要望していたことの一つが実現した。

59年3月16日、マジュロ島に、政府による慰霊の碑が建立され、湯川厚生政務次官以下職員多数と本会会員が参列して竣工式並びに追悼式が厳粛に行われた。

碑の両側の天皇皇后両陛下御下賜の菊花が印象的であった。アマタ・カブア大統領御夫妻外地元の方々大勢が献花され、つづいて参列者全員が献花した。(41-1)



東太平洋戦没者の碑（マジュロ 59.3.16）



東太平洋戦没者の碑（マジュロ 59.3.16）

式典後の慰霊巡拝

3月17日マーシャル班26名は、マーシャル政府のマイクロ・パーム号に乗船、夜遅くマジュロ出港、18日朝マロエラップ環礁タロア島に、午後ウオッセ島にそれぞれ上陸して慰霊し、19日クエゼリン着。墓苑で慰霊祭の後



マロエラップ（59.3.18）